災害急性期における看護師が行う遺族支援についての効果的な研修計画についての検討

（久保田千景ほか、日本災害看護学会誌 2017; 19: 36-46）

2018年6月15日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

背景

未曽有の大災害が発生している中、愛する人を失ったことにより残された家族は心理的・身体的に危機的状況になりやすい。予測のできない災害は突然の死別や、遺族が被災者であるなど複雑な様相を呈することが多く、遺族支援を行うものは、支援を行うことに困難やストレスを感じると考えられる。災害急性期における支援は多職種連携により行われるが、看護師として担うことが出来る役割があると考えられ、今回日本災害看護学会第 18 回年次大会において主に看護職を対象に、災害急性期の遺族支援における看護師としての役割についての学びを共有するワークショップを企画し開催した。

目的

本研究の目的は、災害時遺族支援における看護師として実践可能な役割に関する研究企画について検討を行うことである。

方法

① 対象

ワークショップに参加した者のうち、アンケートの趣旨に同意した者とした。

② データ収集方法

無記名書き置き方式とした。

③ 調査内容

ワークショップでの講義・情報提供について「興味・関心を持つことが出来たか」「知識を得ることが出来たか」「今後の災害急性期における遺族支援に役立つと思うか」「講義内容は理解できたか」について、意見交換については「参加者間で自己の経験や知恵を出し合うことにより、多様な意見に触れ、異なる視点から考えを深めることが出来たか」についての質問に対する回答を単純計算した。回答項目の選択肢は 5 段階(とてもそう思う:5、そう思う:4、どちらともいえない:3、そう思わない:2、まったくそう思わない:1)に点数化した。自由記載に関しては回答ごとに意味を損なわないように内容をまとめた。また、第 16 回年次において同様のワークショップを開催した際に実施したアンケート結果の一部を比較対象とした。

④ ワークショップの概要

構成は講義・情報提供・意見交換であった。講義内容は「遺族支援、遺族の思い」「家族看護学と遺族支援」、情報提供は、平成 28 年 4 月に発生した熊本地震に日本 DMORT 研究会(災害時死亡者家族支援派遣チーム)より派遣された看護師による遺族支援の実際について「熊本地震による遺族支援の実際」という表題で話をした。

結果

ワークショップの参加者数は 51 人、アンケート回答者数は 33 名(有効回答 30 名[有効回答率 91.0%])であった。参加者の職種は看護師、教員であった。看護師経験年数 14.8±8.5 年、教員経験年数は 2.4±7.5 年であった。

1)講義「遺族支援、遺族の思い」

対象者からは「経験を聞くことが出来て良かった」「遺族支援は災害時でも院内でも必要であると思った」「ただ遺族の話を聞くことでも支援になると思った」「看護の原点を考えさせられ、自分を振り返る機会になった」「活動の実際を聞き、具体的な状況を知ることが出来てとてもよかった」という意見が得られた。

2)講義「家族看護学と遺族支援」

対象者からは「看護師としてできることは何かがわかった」「理論を学ぶことが必要だと思った」などの意見が聞かれた。

3)情報提供「熊本地震による遺族支援の実際」

対象者からは「経験を聞けて良かった」「普段のコミュニケーションを改めて見つめ直したいと思った」「相手の立場になる重要さを知る必要があると思った」「大変な状況の中看護師としてできること、その後も苦悩しつつ進まれていることを素晴らしいと思った」などの意見が聞かれた。

4)意見交換について

「今後の日々の業務、また救護活動に生かしたい」「いろいろな立場での意見が聞かれてよかった」などの回答が得られた。今回は第 16 回年次大会より長時間の話し合いを行うことが出来た。

考察

講義「遺族支援、遺族の思い」では回答結果より、本ワークショップの目標の 1 つである「災害急性期における遺族支援・遺族の思いについて知識を得る」はおおむね達成できたと考えられる。看護師だからこそできる傾聴、共感、受容の必要性についての講義は対象者の心に響くものであったのではないかと考えられる。講義「家族看護学と遺族支援」では「家族看護学と遺族支援について知識を得る」という目標はおおむね達成できたと考えられる。家族看護学の大事な視点として、家族の関係性を見る視点、家族の変化を見る視点が挙げられるが、今回家族システム理論を取り上げたことで適切な理論を選択し講義を行うことができたと考えられる。情報提供「熊本地震における遺族支援の実際」では看護師としての役割を遂行していく中で苦労を認識するなどの思いを表出していたが、このことは災害時遺族支援を行う者への支援の充実という方向性を再認識するきっかけになったと考えられる。「看護師という職業の集団に対しての社会からの役割期待を個々の看護師が受け入れられることではじめて行動化される」といわれるが、今回のワークショップは遺族支援の実践における看護師という役割を認識する一助になったことが考えられる。一方、看護師及び多職種連携による遺族支援の実際について知識を得ることはできなかったと考えられる。今後はワークショップにおいて多職種連携についても学びを深めるプログラム構成が必要であると考えられる。